

新たな役割を担う「内港地区」

空見ふ頭



【港内位置図】

鉄鋼専用ふ頭として 中部圏の鉄鋼需要急増に対応

沖荷役とはしけ輸送から、近代的接岸荷役へ脱皮

昭和 30 年代に入り、中部圏では産業構造が軽工業から重化学工業中心に転換し、鋼材などの需要が増加しました。名古屋港での取扱も中部圏入荷量の半数を超えましたが、専用のふ頭が無く、多くは本船とはしけとの間で貨物を積み降ろしする沖荷役に頼っていました。

こうした状況を受けて、空見ふ頭に建設されたのが鉄鋼専用ふ頭です。一部は民間企業に分譲し、残りを公共的な荷さばき区域として整備することになりました。その建設と運営に当たっては、資金調達や効率的運営の観点から官民共同設立の名古屋港鉄鋼埠頭株式会社が行うことになりました。昭和 40 年、第 1 期工事が終了し営業が開始されました。

これと並行して建設された民間の鉄鋼専用ふ頭とともに、名古屋港の鉄鋼荷役は、沖荷役とはしけ輸送の時代から近代的ふ頭による接岸荷役に切り替わっていきました。



ばら物専用ふ頭として開発された空見ふ頭

鉄鋼のほかにもセメント、石炭などの基地が集中

空見ふ頭は上記の鉄鋼専用ふ頭を一例に、ばら物専用ふ頭として計画されました。当時、旧 10 号地（潮凧ふ頭）を除き、ばら物用大型船接岸施設がほとんどなく、非効率な沖荷役が招く滞船の長時間化が深刻な船混み問題の原因となっていたからです。

こうして空見ふ頭には、鉄鋼ふ頭のほか、セメント、石炭などの専用ふ頭、さらには鉄鋼生産の原料となるくず鉄の専用ふ頭などが整備されました。

また、ふ頭南側は、岸壁隣接地の低温倉庫を集約窓口とするフィリピンなどからの青果品輸入が盛んで、この地域の果物や野菜の主要な流通経路の一つとなっています。

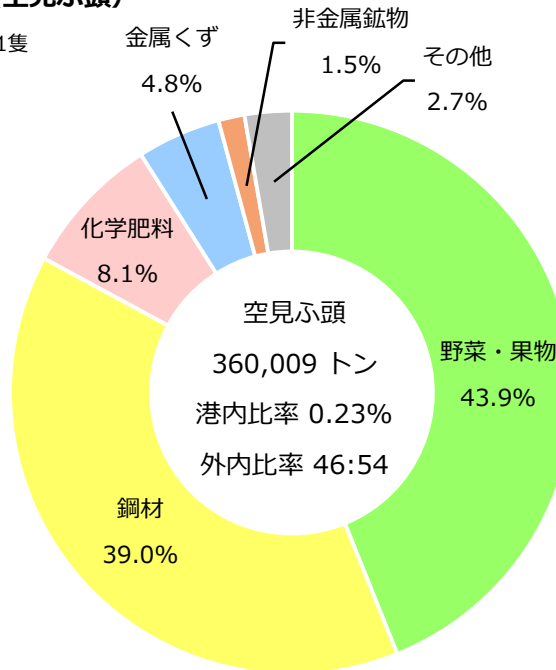
ふ頭内南西部のフェリーターミナルについては別頁に記載しています。

エリア基本データ

ふ頭名称	空見
旧名称	11号地
臨港地区面積	169.6ha
埋立完成時期	昭和14.7.8～昭和51.4.30
バース水深	4.5～10m

公共岸壁（空見ふ頭）

係留隻数 801隻
取扱量と品種



民間計（空見・潮凧ふ頭周辺）

係留隻数 1,233隻
取扱量と品種

